

# ラトナーカラシャーンティの般若波羅蜜修習次第

松 田 和 信

## まえがき

中国西藏自治区に伝えられた梵文写本については<sup>1)</sup>、西藏自治区社会科学院の下で2006年に始まった6年間の保存修復プロジェクトが2011年に終了すると、同じ年にその成果として61巻からなる梵文写本のカラー影印版が4巻の目録を伴ってラサから出版された<sup>2)</sup>。ただ通常の出版とは異なり、筆者の聞くところでは「内部出版」とされて、数セットが印刷されただけで、研究者あるいは研究機関が購入したり、閲覧できる状況には至っていない<sup>3)</sup>。西藏自治区以外で

- 
- 1) 日本語で書かれたものでは、拙稿「アフガニスタン写本から見た大乘仏教—大乘仏教資料論に代えて—」『シリーズ大乘仏教1 大乘仏教とは何か』(春秋社, 2011, pp. 151-184)の末尾(pp. 175-180)に概略を記した。さらに、拙訳の羅焯(Luo Zhao)著「チベット自治区に保存された梵文写本の目録編纂」『仏教学セミナー』88, 2008, pp. 25-36も参照していただきたい。
  - 2) 『西藏自治区珍藏貝葉經影印大全』(全61巻、2011)『西藏自治区珍藏貝葉經写本総目録』(全4巻、2011)。プロジェクトと出版については2012年に中国中央電視台(CCTV)のニュースレポート数種で伝えられた。*From Birch Bark to Digital Data: Recent Advance in Buddhist Manuscript Research-Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15-19, 2009*, Wien, 2014, p. xiv, foot note 14 に CCTV ニュース番組の URL を数種記載。正確に言うと、全体を西藏大藏經に倣って律部、般若部、中觀部、唯識部等の21種の項目別にまとめた60巻と断簡をまとめた1巻(表紙と箱が桃色)、さらに所蔵寺院別の写本にまとめた巻(表紙と箱が茶色)が別個に刊行されたが、両者の内容自体は全体としては同一であると聞いた。加納和雄「梵文和訳『讚法界頌』1-51偈」『インド論理学研究』8 (2015) p. 177 注1にも同様の情報が記されている。
  - 3) CCTV のニュース番組以外では、箱入りの61巻全体(桃色の方)を写したスナップ写真が西藏自治区社会科学院によって設立された貝葉經研究所(ラサ)の研究紀要『西藏貝葉經研究』の創刊号(2014)の裏表紙(中国語版とチベット語版の両者とも)に掲載されている。61巻全体の壮観な姿を確認できる。また同創刊号103頁には注2に述べた21種の項目が列挙されている。

は北京市内のふたつの研究機関に一セットずつ寄贈されたが、中国国内の研究者であっても自治区政府の特別な許可がない限り閲覧はできないと聞く。この影印版には西藏自治区に残されたすべての梵文写本が含まれるというが、61巻全体にどれだけの量のどのような梵文写本が含まれているのか、最近まで筆者には全く分からなかった。しかし、2018年の冬から初夏の間に二度、偶然の結果としか言いようのない経緯で、61巻中、3巻分の写真を中国国外の意外な所で見る事ができた。3巻分の計1300頁ほどに美しいカラー写真で様々な写本が掲載されていた。いずれも貝葉写本で、一頁に表裏2葉分が印刷されているので、全体では2600葉ほどにもなる。掲載された個々の写本の葉数には開きがあるが、文献数としては凡そ80点であった。3巻分でもこうであるから、61巻全体となると想像するだけで気が遠くなる<sup>4)</sup>。写本の数は一以上の筈に入れられた数千点ともいうが、それもあながち誇張ではないのかもしれない。本稿では、筆者が見ることが出来た貝葉写本の中から、これまで全く知られていなかったラトナーカラシャーンティの短編について、写本から回収される梵文テキストを提示したい。

## 当該写本の概要

ここで取り上げる写本は、一葉のサイズが31.6cm×5cmの63葉よりなる貝葉写本である。ただし最終葉は空白であるので、実質は62葉の写本である。文字は12-13世紀頃とみなされるネパール系書体のブラーフミー文字が使われ、一葉に5行ずつ書かれている。これは単独の文献を書写した写本ではなく、主として韻文よりなる26種の短編作品を連写した写本である。影印版では *Prajñā-pāramitopadeśabhāvanākrama* というタイトルが付されているが、26番の奥書に書かれたタイトルをそのまま記載しただけである。筆者は26種全体を細部まで読んだわけではないが、個々の奥書による限り、この写本には以下のような文献が含まれる。各文献の奥書に記されたタイトルと著者名を葉番号とともに紹

4) 3巻分とは別に、サキャ寺所蔵写本については、所載リストだけ別の所で目にしたが、写真自体は見えていない。リストによると『瑜伽師地論』『本地分』や『決定義経釈』などが含まれている。

介する<sup>5)</sup>。

	葉番号	文献名	著者名
1	1v1 - 2v1	<i>Buddhavandanāṣṭaka</i>	記載なし
2	2v1 - 3v5	<i>Buddhāṣṭakastotra</i>	Dharmapāla
3	3v5 - 6v2	<i>Jātakastava</i>	Jñānayaśas
4	6v2 - 7r4	<i>Saptajinastotra</i>	記載なし
5	7r4 - 8v2	<i>Samyaksambuddhabhāṣitasattvārādhanaṣṭotra</i>	記載なし
6	8v2 - 9r3	( <i>Ekagāthāṭīkā</i> )	Dignāga
7	9r3 - 10r1	<i>Aṣṭamahāsthānacaityabandhanāstuti</i>	Harṣa-devarāja
8	10r1 - 12r2	<i>Suprabhātastava</i>	Harṣa-devarāja
9	12r2 - 12v5	<i>Ekottarikastotra</i>	Mātṛceṭa
10	12v5 - 14v5	<i>Avalokiteśvarabhaṭṭārakasya paddhatistuti</i>	Candragomin
11	14v5 - 16r1	<i>Siṃhanādalokeśvarabhaṭṭārakasya stuti</i>	記載なし
12	16r1 - 16v1	<i>Avalokiteśvarabhaṭṭārakasya stotra</i>	記載なし
13	16v1 - 17v3	<i>Mañjuśrīyaḥ stuti</i>	Dignāga
14	17v3 - 21r1	<i>Gaṇḍī nāma mahāyānasūtra</i>	
15	21r1 - 26r5	( <i>Gaṇḍīstava</i> )	Āryadeva
16	26r5 - 30v2	<i>Gaṇḍikāstava</i>	Aśvaghōṣa
17	30v2 - 33v5	<i>Gaṇḍīślokāḥ</i>	Samgharakṣita
18	33v5 - 41r5	記載なし	Sugataśrīmitra
19	41r5 - 44v1	<i>Gurupañcāśikā</i>	(Aśvaghōṣa)
20	44v1 - 45v2	<i>Saptaguṇavarṇanākathā</i>	(Vasubandhu)
21	45v3 - 49r5	<i>Svādhiṣṭhānakramaprabheda</i>	Āryadeva
22	49r5 - 51v2	<i>Jñānasārasamuccaya</i>	Āryadeva

5) 文献名に付された ārya- および著者名に付された ācārya- 等の語は削除して示した。括弧に入れたタイトルあるいは著者名は奥書には書かれていないが、対応する漢訳、チベット語訳等から知られるタイトルあるいは著者名である。

23	51v2 - 56v3	<i>Prañidhānasaptati</i>	Parahitagoṣa
24	56v3 - 60r5	<i>Prajñāpāramitābhāvanākrama</i>	Ratnākaraśānti
25	60r5 - 61v5	<i>Prajñāpāramitābhāvanākrama</i>	(Kamalaśīla)
26	62r1 - 62v3	<i>Prajñāpāramitopadeśabhāvanākrama</i>	Kamalaśīla

上記26種のうち、24番のラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）の『般若波羅蜜修習次第（*Prajñāpāramitābhāvanākrama*）』が本稿で取り上げて梵文テキストを提示する文献である。資料としてはこの新出写本1本だけで、漢訳もチベット語訳も存在しない。わずか4葉の短編ではあるが、今まで全く知られていなかったラトナーカラシャーンティの著作である。写本奥書の著者名の項では「カリ〔ユガ〕時代（kalikāla）の一切智者（sarvajña）にして東方地方出身（pūrvadeśīya）の大学者（mahāpaṇḍita）ラトナーカラシャーンティ師の著作（次項テキスト参照）」と書かれている。内容から見ても、筆者が判断する限り、ラトナーカラシャーンティの顕教面での主著とみなされる『般若波羅蜜論（*Prajñāpāramitopadeśa*）』と比べて矛盾する点は認められない<sup>6)</sup>。「修習次第」というタイトルからも分かるように、これは般若波羅蜜を行ずる修行者の階梯を説く論典であり、その背後にあるのは唯識思想である。「修習次第」という論名が付けられた文献では、カマラシーラ（Kamalaśīla）による3編が著名であるが、続いて書写されている25番と26番のふたつについては—25番の奥書には著者名の記載は見られないが—そのカマラシーラの『修習次第』の一部を抜き出して、25番には24番と同じ *Prajñāpāramitābhāvanākrama* のタイトル、26番には *Prajñāpāramitopadeśabhāvanākrama* のタイトルを付したにすぎない。26番の奥書に記された論名が影印版では本写本全体のタイトルとして誤記されているのである。なお、抜萃された箇所については、25番は『修習次第』（初編）において『入楞伽經』第10章256-258偈を援用して階梯論を説く著名な箇

6) ラサのポタラ宮所蔵写本に基づく *Prajñāpāramitopadeśa* の梵文校訂テキストが中国・四川大学の羅鴻（Luo Hong）教授によって近々刊行される。この出版に併せて、Luo Hong 教授のテキスト校訂を支援された龍谷大学の桂紹隆博士等による和訳も刊行されるものと思われる。

所<sup>7)</sup>、26番は本稿で紹介するテキストの第9節と第10節に示される「三昧に入った者の6種の過失とその対治」を説く段落と同様のテーマの箇所である<sup>8)</sup>。これら3種が連写されていることには何らかの理由があるはずである。ランダムに書写したとは思われない。

なお26種のうち、末尾の3種以外について多少触れておくと、そのほとんどは讃歌、讃頌の類いであるが、思想的な内容を持つ文献も含まれる。この中にはすでにチベット語訳あるいは漢訳で知られている文献もあり、この写本によって初めて明らかになる文献もある。中には、従来知られていたものも含めて、馬鳴 (Aśvaghoṣa) や提婆 (Āryadeva) の著作とされる文献もあるが、いずれも後代の文献に違いない。14番から17番の、タイトルに捷稚 (gaṇḍī) の語が付けられた讃頌類には大乘經典が1点混じっているが、これも捷稚の製作法とその効能を韻文で説く短編の大乘經典であり<sup>9)</sup>、恐らく馬鳴に帰せられる著名な16番を中心に捷稚関連文献を集めて連写したのであろう<sup>10)</sup>。さらに奥書にタイトルは記されていないが、18番も内容から判断して捷稚をテーマとする韻文作品である。著者については上記一覧ではスガタシュリーミトラとしたが、正確に言う「大学者 (mahāpaṇḍita) にしてスマトラ島出身 (Suvarṇadvīpa) のスガタシュリーミトラ師の著作」と奥書に書かれている<sup>11)</sup>。ただ寡聞にして、筆者にはこの人物について知識がない。なお、ディグナーガに帰せられる6番

7) G. Tucci, *Minor Buddhist Texts*, Part II (Rome 1958) pp. 210-212. この箇所に対しては多くの研究が重ねられているが、最新の研究として、一郷正道『瑜伽行中観派の修道論の解明—修習次第の研究—』(科学研究費補助金基盤研究C成果報告書 2011) および同『ハリバドゥラの伝える瑜伽行中観派思想』(東本願寺出版、2015) を挙げておきたい。なお25番を読むと、ツッチ校訂本とは複数のバリエーションが見られる。

8) Tucci, *ibid.*, p. 208, 同じ文章は『修習次第』(後編) にも現れる。Tucci, *Minor Buddhist Texts*, Part III (Rome 1971) pp. 10-21. 同上一郷正道科研報告書33頁参照。ここでも、ツッチ校訂本とは複数のバリエーションが見られる。なお、9-10節の内容はカマラシーラの『修習次第』と同じではない。

9) この大乘經典は漢訳されていないが、チベット訳は存する。北京版964番。

10) アールヤデーヴァに帰せられる15番は奥書ではタイトルが記されていないが、別写本を用いてすでにインドより出版されている。Janardan Shastri Pandey, *Bauddhastotrasaṃgraha*, Motilal Banarsidass (Delhi 1994) pp. 61-65.

11) 14番から18番の捷稚関連5文献については佛教大学大学院の吹田隆徳氏が解説研究中であり、研究成果の公開が俟たれる。



はたった一偈からなるブツダへの讃頌 *Ekagāthā* を分解して韻文で拡大した文献である<sup>12)</sup>。さらに、19番の *Gurupañcāsikā* と22番の *Jñānasārasamuccaya* は既知の文献ではあるが、従来の写本では欠落していた箇所も含まれた写本である<sup>13)</sup>。現時点で筆者に判明している点はこの程度に過ぎないが、いずれ個々の文献が相応しい研究者を得て、テキストと翻訳を含む研究が公刊されることを期待したい。

### 梵文テキストの提示

以下にラトナーカラシャーンティ著『般若波羅蜜修習次第』の内容を12項に分けて、目次として示し、それら12項目に分節した梵文テキストを提示する。なお、写本に見られる代用アヌスヴァーラは修正して、書写生の書き癖もすべて正規形に戻した。さらにダング（句読点）については自由に削除、加筆したが、これらについては一々注記しない。実際の写本で誤写と思われる箇所および平行文献の異同のみ注記した<sup>14)</sup>。

- [ 1 ] 帰敬偈
- [ 2 ] 修習の開始—発菩提心
- [ 3 ] 存在の分析—唯識説
- [ 4 ] 迷乱知の顕現
- [ 5 ] 出世間智の獲得
- [ 6 ] 阿頼耶識の転依
- [ 7 ] 出世間智の同義語
- [ 8 ] *Ālokamālā* による三性説
- [ 9 ] 三昧時の六過失

---

12) チベット語訳が存する。北京版2063番。 *Ekagāthā* については、加納和雄「*Ekagāthā, Caturgāthā, Gāthādvayadhāraṇī*—11世紀のインド仏教における読誦經典のセット—」『密教文化』227号（2011）pp. (49)–(87) 参照。6番の内容を含めて、すべて科研費研究分担者の加納和雄氏（駒澤大学）より情報提供を受けた。

13) 19番は完全な写本であるが、22番は第15偈と第16偈 ab が欠落している。

14) 作成したテキストを加納和雄氏に読んでいただいて多くの修正を加えることができた。御礼申し上げる。なお筆者と加納氏による共訳として、本テキストに基づく和訳が『インド論理学研究』第11号に掲載される予定である。

- [10] 過失の対治  
[11] 三昧後の誓願行  
[12] 奥書

略号

ĀM	- <i>Ālokamālā</i>
ĀM(L)	- Chr. Lindtner, <i>A Garland of Light - Kambala's Ālokamālā</i> , Fremont 2002.
BCA	- <i>Bodhicaryāvatāra</i>
LA	- <i>Laṅkāvatārasūtra</i>
Ms.	- 当該写本

|| om namo buddhāya ||

[1] niṣpra(56v4)pañcam anālambam acintyam avikāriṇam |  
sarvadoṣavinirmuktaṃ vande sarvavidam sadā ||

yatprasādākaradhvastamohadhvāntacayaṃ sphuṭam |  
paśyanti jagatas tattvaṃ (56v5) taṃ vande vadatāṃ varam ||

[2] iha khalu<sup>15)</sup> bodhisattvenānuttarāṃ samyaksambodhim abhisamboddhukāmena  
prajñāpāramitā bhāvayitavyā | tatra prathamataḥ kvaacid api mano(57r1)'nukūle rahasi  
sukhāsana upaviśya paryaṅkam ābhujya duḥkhadukhatayā saṃskāraduḥkhatayā  
pariṇāmaduḥkhatayā ṣaḍgatikaṃ sattvaṃ imaṃ duḥkhitam avalokya mahā-(57r2)  
karuṇāśamanvāgato bodhicittam utpādayet ||

[3] tadanu bodhicittasvarūpam avadhārayituṃ dṛḍhīkartuṃ vṛddhiṃ virūḍhiṃ  
vipulatāṃ paripūriṃ netuṃ bhāvān e(57r3)vaṃ vicārayet | yad etan nīlapītādyākārajātaṃ  
na tad bāhyam āntaraṃ<sup>16)</sup> vā vastu | ekānekasvabhāvavirahāt | tathā hi<sup>17)</sup> | na tad ekaṃ  
bhāgabhedena pratibhāsanāt (57r4) | nāpy anekaṃ paramāṇuśaḥ paramāṇor ayogāt |

15) Ms. iha ca khalu.

16) Ms. antaraṃ.

17) Ms. tathāha. 以下は *Tarkabhāṣā* に示される唯識学派を解説する一段とほぼ同文である。V.  
H. R. Iyengar, *Tarkabhāṣā and Vādashāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda*, (Mysore 1952) p.

tathā hi yady asau sāmśaḥ sa katham paramāṇuḥ | atha niraṃśaḥ tadā saṃyuktāḥ  
paramāṇavaḥ sarvātma(57r5)nā saṃyogāt parasparam abhinnadeśāḥ syur iti sarvaḥ  
piṇḍaḥ paramāṇumātraḥ syāt | gajo 'pi girir api sāgaro 'pi | uktañ cāryalaṅkāvatāre |

bāhyo na vidyate (57v1) hy artho yathā bālair vikalpyate |

vāsanāluṭhitam<sup>18)</sup> cittam arthābhāsam pravartate || LA, X 154cd-155ab

yathaiva darpaṇe rūpam ekatvānyatvavarjitam |

drśyate na ca tatrāsti tathā bhāveṣu bhāvatā || iti ||<sup>19)</sup> LA, X 709<sup>20)</sup>

ta(57v2)smān nāsti vijñānabāhyo grāhyo 'rthaḥ | tadabhāvād grāhakatvam api  
vijñānasya nāsti | sarvathā dvayaṃ nāsti grāhyaṃ grāhakaṃ ca | evaṃ vijñānavādī |  
upakalpi(57v3)tañ ca vijñānaṃ pratyuktam ||

[4] tataḥ kevalam anādyavidyābhyāsavāsanābalaviplutānām<sup>21)</sup> bālānām buddhir  
asataiva<sup>22)</sup> tena tenākāreṇa pratibhāsate | tam eva (57v4) cākāram asantaṃ nimittīkṛtya  
lokasya dvayakalpanā dvayagrāhaś ca sarvānarthanidānabhūtaḥ pravartate | yāvac  
cāyam ākāraḥ pratibhāsate tāvat paramā(57v5)rtho na drśyate | keśamaśakādidarśibhis  
taimirikaiḥ keśādīsūnyatāvat ||

[5] tataḥ sa evaṃ upaparīkṣya sarvanāmāni sarvanimittāni parivarjayati | tatas tasya  
(58r1) sarvadharmānālambane samādhau nirjalpe nirābhāse sthitasya  
pūrvaprayogavāsanābalād anābhogato 'nabhisamskārataḥ<sup>23)</sup> sarvaprapañcanimittānām

---

67, ll., 14-18, 梶山雄一『論理のことば』(中公文庫 1975年) pp. 136-137: nāpy anekam,  
paramāṇuśaḥ paramāṇor ayogāt | tathā hi - yady asau sāmśaḥ katham paramāṇuḥ? atha niraṃśaḥ tadā  
saṃyuktāḥ paramāṇavaḥ sarvātmanā saṃyogāt parasparam abhinnadeśāḥ syur iti sarvaḥ piṇḍaḥ  
paramāṇumātraṃ syāt, parvato 'pi kṣitir apīti | ただ、最初の文章は *Tarkabhāṣā* に認められず、  
喩例も異なるので、別文献を両者が取り込んだ可能性が高い。

18) Bunyiu Nanjio, *Laṅkāvatāra Sūtra*, (Kyoto 1923) p. 285: vāsanair luḍitam.

19) Ms. bhāvateti ||

20) *Op. cit.*, p. 353; yathā hi darpaṇe rūpam ekatvānyatvavarjitam | drśyate na ca tan nāsti tathā  
cotpādalakṣaṇam || 709 ||

21) Ms. anādyavidyā 'bhyāsavāsanābalaviplutā.

22) Ms. buddhir asahaiva.



astamgamā(58r2)d<sup>24)</sup> avikalpam anābhāsam sarvadharmasūnyatādarśanam  
kevalavimalānantanabhonibham<sup>25)</sup> lokottarajñānam jāyate |

[6] tad eva pāramārthikam bodhicittam | saiva mukhyā (58r3) prajñāpāramitā | sa eva  
ca sarvāvaraṇapratipakṣo mārگاḥ | tena ca pratipakṣeṇālayavijñānasamnivīṣṭānām  
sarveṣām sāmkleśikadharmabījānām<sup>26)</sup> tadvāsanānā(58r4)m ca parikṣayāt  
pratiṣṭhādehabhoganirbhāsānām vijñānānām nirodhāt<sup>27)</sup> tad ālayavijñānam  
ālayavijñānalakṣaṇaparityāgād<sup>28)</sup> anāsravadhātulakṣaṇam parigrhṇā(58r5)ti |

[7] sa evānāsravo dhātuḥ | buddhānām dharmakāyaḥ | bhūtakotiḥ | tathatā | paramārthaḥ  
| dharmadhātuḥ | bhūtāni tattvāni teṣām kotiḥ paryanta iti bhūtakotiḥ | nityam tathaiva  
(58v1) bhāvād iti<sup>29)</sup> tathatā | paramasya lokottarajñānasyārthaḥ paramaś cāsāv arthaś  
ceti<sup>30)</sup> vā paramārthaḥ | dharmā āryadharmās teṣām dhātur ādhāra iti dharmadhātur iti |  
tatprāptau tadadhī(58v2)nā sambhoganirmāṇakāyaprāptiḥ sarvākārasakalajagadartha-  
lakṣaṇeti<sup>31)</sup> ||

[8] tad imām bhagavatīm prajñāpāramitām bhāvayato 'vasthāḥ samupajāyante |  
yatho(58v3)ktam |

audāsīnyam<sup>32)</sup> ivāyāti svapatīva nirutsakam |

cittam nairātmyam ālambya śāntam<sup>33)</sup> viśrāmyatīva ca || ĀM 251

karoti stabdhatām akṣṇoḥ<sup>34)</sup> śīrasaś cāvanamratām |

23) Ms. anābhogataḥ | anabhisamskārataḥ |

24) Ms. astamgamā(58r2)t\*.

25) Ms. -nabhonibhalokottarajñānam.

26) Ms. kleśikadharmabījānām.

27) Ms. niro<dhā>t\*.

28) Ms. ālayavijñānalakṣaṇaparityāgāt\* |

29) Ms. {bhā}(58v1)bhāvād iti.

30) Ms. caiti.

31) Ms. -lakṣaṇa iti.

32) Ms. audāsīnyam.

33) Ms. śrāntam.

34) Ms. tabdhatām akṣṇoḥ.

staimi (58v4) tyam cittacaittānām śūnyatā śūnyatekṣaṇām<sup>35)</sup> || ĀM 252

drṣtatattvaḥ<sup>36)</sup> kṛtārtho 'ham iti līṅgekṣaṇāt punaḥ |

bhāvanām notsrjed vīraḥ parato 'py asti tat<sup>37)</sup> param || ĀM 253

tadyathā |

nirāsā(58v5)t kalpitasyāśya kiñcid utsrṣṭacitravat<sup>38)</sup> |

dhyānotthito 'pi sakalam dhyāmalam jagad īkṣate || ĀM 236

śīrṇavaj jīrṇavac caiva bhagnavac ca samantataḥ |

śūnyagrāmavad dhvastam ca nirārāmaṁ<sup>39)</sup> nirāśrayam || ĀM 237

(59r1) bhṛśam udvegajananaṁ<sup>40)</sup> cīrīrāvam ivādadhat |

niḥsvāmikañ ca<sup>41)</sup> niḥsvañ ca<sup>42)</sup> kevalam nāmamātrakam || ĀM 238

iti kalpitasyabhāvanirāśalakṣaṇam || punar āhuḥ kambalāmbarapā(59r2)dāḥ |

drṣṭe tu paratantrākhye svabhāve vīkṣate punaḥ |

svacittasyandanārūḍham antar viśad ivātmanaḥ || ĀM 239

indrajaloditaprakhyam tad eva<sup>43)</sup> bhrāntimātrakam |

dhvāntā (59a3) krāntam ivāpnoti apaśyaṁs tatra kalpitam<sup>44)</sup> || ĀM 240

vāsanāśeṣarekhābhir ālīḍham iva sarvataḥ |

kleśair iva ca saṁkīrṇam cakravac ca paribhramat<sup>45)</sup> || ĀM 241

---

35) Ms. śūnyatekṣaṇām.

36) ĀM(L): drṣṭād eva.

37) ĀM(L): asty ataḥ.

38) ĀM(L): nirāsāt kalpitasyāsmād īśad unmṛṣṭacitravat.

39) Ms. dhvastam nirārāmaṁ. ĀM(L): dhvastam ca nirārāmaṁ.

40) ĀM(L): bhūsamudvegajananaṁ.

41) Ms. niḥśvāsikañ ca. ĀM(L): asvāmikaṁ ca.

42) Ms. nisvañ ca.

43) ĀM(L): tad idaṁ.

44) ĀM(L): dhvāntākrāntam ivāśeṣam paśyan tatra na kalpitam.

gāḍhasvapno(59a4)tthitaṃ jñānaṃ lakṣyaṃ lakṣaṇaṃ ca lakṣaṇam<sup>46)</sup> |

dr̥ṣṭanaṣṭanibhaṇ caiva kim atīva<sup>47)</sup> ca paśyati || ĀM 242

iti paratantrasvabhāvalakṣaṇam || punar āhus ta eva |

jñāne<sup>48)</sup> tu pariniṣpanne sarvam ekarasā(59a5)tmakam|

nirvibhāgam anādyantaṃ nirākāraṃ nirāgraham || ĀM 243

anutsedham anāyāmaṃ adīrgham aparimaṇḍalam<sup>49)</sup> |

sūryanirbhinnatimiram ākāśam iva nirmalam || ĀM 244

samatādharmanirvedhā(59v1)t sarvaṃ samasamaṃ punaḥ |

saṃvṛtyā dr̥ṣṭadharmo<sup>50)</sup> 'sau paramārthe ca nekṣate<sup>51)</sup> || ĀM 245

vikalpaḥ saṃvṛtiḥ khyāto<sup>52)</sup> vikalpāntarakāraṇam|

sa eva paramārthas tu vikalpavinivartakaḥ || ĀM 246

ityā(59v2)di bahuvistaram | lokottarasampattisukham avācyam | vaktum aśakyatayā  
nocyate pratyātmavedyatvāt tasya ||

[9] bhāvayatā ca samādheḥ ṣaṭ caurā veditavyāḥ | ye (59v3) kuśaladharmacittaṃ  
muṣitvānarthe<sup>53)</sup> pātayanti | tadyathā styānamiddhalayauddhatyakaukr̥tyavicikitsāḥ<sup>54)</sup> |  
tatra (1) styānaṃ dadhyādibhakṣaṇajanitaḥ kāyagaurava(59v4)tādiviśeṣaḥ | (2) middho  
nidraiva | (3) layo līnatā cittasya | ālambane 'paṭupracāratā | (4) uddhatyam<sup>55)</sup>

45) ĀM(L): kleśair eva saṃkīrṇaṃ ca cakravac ca paribhramat.

46) ĀM(L): gāḍhasvapnotthitajñānaṃ lakṣālakṣaṃ ca tatksaṇam.

47) ĀM(L): apīva.

48) ĀM(L): jñāte.

49) ĀM(L): anudvegam anāyāsam adīrghaparimaṇḍam.

50) Ms. dr̥ṣṭedharmo.

51) ĀM(L): ... paramārthena neṣyate.

52) ĀM(L): vikalpaḥ saṃvṛd ākhyāto.

53) Ms. muṣitvā 'narthe.

54) Ms. styānamiddhalaya uddhatyakaukr̥tyavicikitsāḥ.

55) Ms. uddhatyam.

uddhatatā cittasya vikṣepaḥ | (5) kaukṛtyaṃ kutsitaṃ kṛtaṃ kukṛtaṃ | (59v5) tasya  
bhāvaḥ kaukṛtyaṃ | paścāttāpaviśeṣaḥ | (6) vicikitsā saṃśayaḥ kim evaṃ  
gurūpadiṣṭaṃ<sup>56)</sup> na vā ||

[10] tatra (1) (2) styānamiddhapraśamāya āhāre mātṛajñatā | anityatāsmaraṇam | (60r1)  
śaradāśatavyavalokanam<sup>57)</sup> | (3) layanirākaraṇāya prajñāvīryabalam udyānavāpīśarajjyo-  
tsnādipramodakārivastusmaraṇam vā | (4) auddhatyapraśāntyā<sup>58)</sup> upaśamaḥ | (5) (6)  
kaukṛtya(60r2)vicikitsāvināśāya samādhiguṇasmaraṇam | kalyāṇamitre ca tīvraśraddhā  
gauravapremaprasādatā ca | yadā ca doṣaṣaṭkavarjitaṃ svarasavāhi ca bhavati cittaṃ  
ta(60r3)dā samyaggatam upekṣet ||

[11] samādhivyutthitaḥ san praṇidhānaṃ kuryāt |

abhuktvāpāyikaṃ duḥkhaṃ vinā duṣkaracaryayā |

divyenaikena kāyena jagad buddhatva(60r4)m āpnuyāt<sup>59)</sup> || BCA, X 47<sup>60)</sup>

bhadracaryādipraṇidhānaṃ vā paṭhed iti ||

[12] prajñāpāramitābhāvanākramaḥ samāptaḥ ||

kṛtir iyaṃ kalikālasarvajñapūrvadeśīyamahāpaṇḍita(60a5)ratnākaraśāntipādānām ||

\* 本研究は JSPS 科研費 〈挑戦的萌芽研究〉 JP16K13154 の助成を受けたものである。

56) Ms. gurupadiṣṭaṃ.

57) Ms. śaradāśapavyavalokanam.

58) Ms. auddhatyapraśāntye.

59) Ms. āpunayāt\*.

60) *Buddhist Sanskrit Text*, No. 12: *Bodhicaryāvatāta* (Darbhanga 1960), p. 286.